

その日、空はどんよりと曇ったまま、雪の降る気配すら見せて辺りの大気を澁ませていた。大司教座を持つこのケルンの大聖堂にも、物乞いの影がひしめき合っていて——それはさながらそびえ立つ主の殿堂をあざ笑っているかのようだった。

「お恵みをー」

「この足のない男に、今日のパンをー」

全く、尋常な世の中ではないのだ。大商人が教皇になり、教会が天国への切符を貧しい人々に売りつける。それでも、人々はこうして腐敗した殿堂に集うのだった。

救いを求めるために。

「・・・何もしなくてよいのですか？」

少年が、少し怯えた瞳で傍らの司祭を見上げた。

「・・・今はね。施しをするなら、彼らの一部にだけ、という訳にはいかないからね・・・」

司祭は、淡い金色の髪を持った少年の頭を優しく撫でた。初めて都市にやって来た少年には、迫り来る彼らの姿が異様にさえ思えたのだろう。

「さあ、ここに君の師となる人がいる。まだ若いが、優秀な音楽家だ」

少年は眩しげに司祭の顔を見つめ、それからそのすらりとした指の指し示す方向を見た。そこには下界の雑踏など置き忘れてきたかのような、華やかな薔薇色のステンドグラスが並んでいた。

「失礼します・・・お邪魔してよろしいですか？」

少年がおらずおらずと演奏台の人を見上げて訊いた時、カミュ

は『サンクトウス』の小コラールを書いていた。その声があまりにも天使に似ていたので、彼は驚いて身を竦め、それからゆつくりと声の方を振り返った。

「ごめんさい・・・僕、今日からお世話になりますキリルといします」

「・・・ああ、最高声部の・・・」

成程、それならば納得がいく。カミュはしばらく感慨に耽るように首を傾げてから、つと立ち上がって少年の方へと歩き出した。

「・・・初めまして。私はこのオルガニストを勤めているカミーユ・フロベール・・・天使がやって来たのかと思つたよ。ここにはそんな澄んだ声の持ち主はいないから——」

キリルはしげしげとカミュを見つめた。何故ならば、フランス系の名を名乗つたその人は、ルビーのような赤い髪と瞳の類稀な美しさを持つ青年だったので。

「僕は・・・東の人間なんです。だから・・・」

「判るよ。そんな風に、硝子の粉を鍍めたような、冷たく透き通つた声を持つ少年はゲルマン諸国にはいない。私の生まれ故郷にも・・・君は何故ここに？」

神秘的な程深い紅の瞳に見つめられて、キリルは少し俯いた。胸が、熱くなるのを感じた。

「僕は・・・父を知らないんです。母は先日、病で亡くなりました。小さな町の聖歌隊にいたんですけど、食べて行けないから・・・それに、もしこのケルンに来て、一生懸命頑張って、有名な声楽家になれたら、もしかしたら父に会えるかもしれないと思つて・・・」

「声楽家か・・・しかし君のその声では行く末は去勢歌手、ということになるかもしれない。その覚悟は出来ているのか？」
カストラートというのは、大人でありながら少年の声を発する男性のソプラノのことだ。無論自然に成長するままにしておいたのではやがて声変わりしてしまうので、その前に去勢手術を行つて変声を止めてしまう。あまり外の世界の現実など知らぬ気な少年からそのような言葉を聞いたので、カミュは心配になつたのだつた。

「はい。僕は神様に一生を捧げるつもりですから」
少年の、迷いのない声が告げる。

「そうか・・・。私もかつては、そのように考えていたよ」
カミュはふと微笑んだ。偽りではなかった。自分も彼の年

頃には、音楽を通して神を称えようとそれだけを願っていたのだ。そしてそのために、自分を支えてくれていた存在を切り捨てた。

その結果がどうだったか。

「君の……瞳の色を覚えてほしい。髪の色も。」

「え……?」

キリルは突然の問いにびつくりしてカミュを見上げた。

「どういう……こと?」

「……こうして目を閉じると、様々な色が浮かんでくる。濃いブラウンやエメラルド・グリーン、淡いすみれ色……でも私は、いつの間にか願っている。その瞳の色が地中海のブルーで、髪は太陽のような黄金だったら、と……」

「……覚えていないんですか」

カミュはにっこりと笑った。こういう反応は、これが初めてではなかった。

「私はある罪の為に視力を失った。キリル、君も気をつけるといい。神を称えようとするあまりに、周りが何一つ見えなくなってしまうことがないように。」

「あ……」

キリルは思わず返す言葉を失ってカミュを見上げた。先程、初めてカミュの姿を見かけた時に感じたのは、言い知れぬ悲しみと、それを懸命に浄化しようとする祈りではなかったか。音を紡ぐことで。

「……どうして……」

戸惑いがちな声が、続ける。

「……もう、治らないんですか……?」

見えていないと聞かされても、視線が上目遣いになるのをキリルは止められなかった。他人の傷に触れるべきではない、と思う。だが青年の毅然とした態度と、自分も同じ立場にいるという恐怖が、少年にその問いを発させたのだ。

「そうだね……君はかつての私を思わせるから。話してみてもいいかもしれない」

不意にそんな気になったのは、少年の声が遠い日の親友を思わせたからだろうか。カミュは呟くようにそう答えると、盲目とは思えない確かな足取りで演奏台の椅子へと戻って行き、キリルに小さな木彫りの補助椅子を勧めた。誰もいない聖堂に、椅子を引く音や少年の息づかいが遠く響く。夕の礼拝まで、まだ存分に時間はある。カミュは演奏台の脇に

置かれたインク壺に蓋をしてから、少年の方へゆつくりと向き直った。

「・・・まだ、私がシュテューリンゲン伯領の外れの町にいた頃の話だ。私は小さな町の教会オルガニストの息子で、その教会には、まるで大天使のような黄金の髪と青い瞳をした少年がいた」

静かに語る声は、透き通っていて一点の曇りもない。決して明るくはない過去を暴き出すことに幾分かのうしろめたさを感じながらも、キリルはいつしかカミュの話に引き込まれていった。

「ミロ！ ミロ！」

温かに降り注ぐ木漏れ日の下で、弾んだ声が響いた。

「試験・・・受かったんだ！これで僕は、いつでも正式なオルガニストになれる！」

「・・・本当に」

ミロと呼ばれた少年は、燭台を削る手を止め弾かれたように顔を上げた。目の前で、肩より少し長いくらいの赤い髪が揺れている。

「すごいじゃないか！ 最年少だろ？」

「うん・・・でもまだまだだよ。まだ難しいところになると時々つかえるし、即興演奏はあまり上手くないから。君が鞆を押してくれている時は、胸がいつぱいで息苦しくなるほどいろんな音が溢れてくるのね」

カミュはミロの横に並んで腰を下ろしながら、そう言つて微笑つた。年端のゆかない少年たちは誰もが荘厳な教会の大オルガンを好むものだったが、カミュは小さな室内オルガンの方が好きだった。ポジティーヴには、大オルガンでは得られ

1. Agnus Dei

der Mai, 1516.

ない『呼吸』がある。本当に気の合った鞆押しと二人で音楽を作るとき、オルガンはさながら命を与えられたかのように歌うのだ。

ミロが誇らしげに、隣のカミュを見た。

「じゃあ僕はカミュの専属カルカントになるよ。カミュが作曲する時にはきつと側にいて、鞆を押していてあげるから。その代わり、いつか皇帝陛下の御前で演奏することになっても、カルカントは僕を指名して欲しいな」

「ミロー皇帝陛下だなんて・・・！」

「お世辞じゃないさ。僕にはわかる」

思わず声を上げたカミュの反論を、ミロは唇の前に人差し指を立てて封じた。深いブルーの瞳が、少年らしい生き生きとした光を宿して赤い瞳を見つめていた。

「カミュは絶対有名になる。だって君が弾くと、団子みたいにもつれてる音がたくさんきれいな旋律になるんだから。まるで七色の光の糸が、上になり下になりながら、一枚の大きな綾織物を創つてみたいに。」

「それは——」

その時、温かな風がぎつと吹き渡った。ミロの膝の上で山

を作っていた木くずがふわりと巻き上げられ、無数の鳥の羽根のように宙を舞う。試験のためにフリルのシャツを着ていたカミュは丁度その風下にいたので、木肌色の吹雪はそっくりそのままカミュの上へと降りかかった。

慌てたミロの声が、落ち着いた静けさを破る。

「ごっ・・・ごめん！大丈夫 折角の服が・・・！」

「いいよ、全然平気。これ、ミロの匂いがするから。」

「え・・・？」

カミュは髪に絡んだ木くずをとろうと慌てふためいた様子のミロを押し止め、笑った。

「いつも演奏台に座っているだろう？そうすると風から木の匂いがして、君が歌っているのがわかるんだ。声には出さなけれど、君が作った風が歌つてる。聴こえるんだ。だから僕は、声を出す代わりに指でその歌にお返しをする・・・。僕たちのオルガンがそんなふうに関えるとしたら、それは君のお陰だよ」

「カミュ・・・」

髪に伸ばされたミロの手を取り、カミュはミロの匂いをかいだ。真新しい木屑の匂い。こうして瞳を閉じていても分かる。

ミロは、歌を歌う風だ。

「……たらいいな……」

小さな小さな声が、黄金の髪の少年の口から漏れた。

「え……?」

「いつまでも、ずっと一緒にいられたらいい。カミュが有名になっても、いつか結婚する日が来ても、君のそばにいられたら——」

不意に、溜め息のような呟きが、黄金の髪の少年の唇を零れ落ちた。カミュはきつと、どンドン出世していく。そしていつか、ミロには手の届かない所まで行ってしまうかも知れない。

「ミロ……?」

だが、カミュは不思議そうに首を傾げて笑っただけだった。彼にはわからなかったのだ。何故ミロがそんなことを願うのか。未だ『別離』を知らない少年には、それが親友の杞憂に過ぎないように思えたので。

「どうしたんだ……?らしくないよ。君は僕の専属カルカントになつてくれるって、今言つたばかりなのに。」

「……うん、そうだね。何となく弱気になつた……ね、

約束してくれる……? どんな時も、ずっと一緒にいるって。」

風が、優しい葉すれの音と共に吹き過ぎてゆく。

「——勿論。約束するよ。どんな時も、二人は一緒だよ……」

だが、『別離』は少年達の考えていたよりもずっと早くにやつて来る。折しも社会は濃み果てたその身を人々の前に曝し、誰もが激動の波を被ろうとしていた。少年時代を共にした二人が、それぞれどんな道を歩みどのように流されて行くのか——。そして未だ十才のカミュは、何一つ知らない少年だった。社会のことも、ミロのことも、そして自分自身のことさえも。

「おや、ミロ！ もう終わりかい？ あの頑固なガストン爺さんの所に行つてたんだらう？ あそこは今大変なんじゃないのか？」

工具の袋を背中に背負つたミロをみとめて、八百屋のおかみが声をかけた。いつもは日が暮れるころに帰つてくるのに、こんな昼間に帰つてくるとは珍しい。

「うん！ でも僕の仕事は終わつたんだ。主棟の修復も殆ど終つたし。僕は細かい細工をするだけだから」

「ふうん。あんたの細工は奇麗だからねえ。いつそのこと、本物の彫物師になつちまえば？ うちが改修する時は、あんたを指名してやるからさ」

おかみは笑いながら店の奥へ行き、小さな紙包と袋を持つて戻つてきた。彼女は、ミロの母親を知っている。かつて、ミロの母親が倒れた時に最期を看取つたのも、彼女だつたのだ。

「はい。今日の分だよ。いつもお手伝いご苦労さん。」
「いいえ。」

「それとこれ・あつちこつちほつつき歩いてる叔父貴が土産にくれたんだけど、うちにラテン語読めるような学問のある

奴はいないからさ、あんたにあげるよ。確か、あんたは読めるだらう？」

こくりと頷いて、ミロは包みを受け取つた。ラテン語は、イタリアにいた頃に、母親から手ほどきを受けている。刺繍の入つた袋から濃い緑の表紙の分厚い書物を取り出し、ミロは思わず声を上げた。

「これ・・・聖書だ！」

「うん、何でもエラスムスとかいう偉い学者さんが編集したらしいよ。ついこの間出版されたんだつて」

「すごい・・・！」

ミロは、まるで眩しいものを見つめるかのように瞳を細めた。エラスムス。現代最高の、人文主義者の名だ。

「本当に・・・くれるの」

「勿論だよ。さあ、持つておいき。」

「あ・・・ありがとう！」

ミロは聖書を抱き締めて、深々とおかみに頭を下げた。こんな幸運が無い降りてくるとは、思いもしなかつた。すぐにカミュに知らせなくては。今まで教会で聞くことしか出来なかつた神の言葉が、今腕の中にあるのだ。

ミロは工具の袋を抱え直すと、一目散に教会を目指した。

この時間なら、カミュは教会で練習をしている筈だった。

えてきたのだ。

「だつてそれは、学者様の書いたものだもの。学問の世界ではラテン語は当たり前だし、だからこそこの国でも通用するんだらう？」

「それはそうだけど……」

では、学問は学者のためにあるんだらうか？

「……ミロは、よく街のことを見ているね。」

「すごいじゃないか、ミロ！」

教会へ駆けつけたミロが最初に聞いたカミュの言葉は、近

年まれにみる興奮に包まれた賛辞だった。

「噂には聞いていたけど……本当に発行されていたなんて！」

すごい人気で、大変なんだらう？ 手に入れるのは。」

「うん。……でも、おかみさんはラテン語だから読めないつて

言つてた。無理もないと思うよ。僕だつて、母さんが教えて

くれなければラテン語なんて知らなかつた。エラスムス博士

は、どうしてドイツ語で発行しなかつたのかな……？」

素朴な疑問のつもりで口にした言葉は、何故かミロをどき

りとさせた。身分の低い、無学な人間は、何かを知ることも、

その必要もない。そんな社会の常識が、急に不当なものに思

意と、尊敬に満ちていた。カミュが、瞳を細めてミロを見つめた。その眼差しは、好

「あんまり大人っぽい見方をするから、時々本当に同い年なの

かどうか判らなくなる……。君のお母さんのお陰なのかな」

「そんな……」

ミロは激しく首を振つた。

「大人っぽいとか、そんなことじゃない。……多分、僕みた

いな立場にいる人は少ないから、つい普通の人と違うことを

考えてしまうんだと思う。……そう、ただちよつと違うだけ

なんだ……」

ミロはそこで言葉を切つて俯いた。確かに、自分は特異な立場にある、と思う。母は過激な修道士の従妹だった。義父は、

この地の領主だ。なのに自分は町で半ば孤児のような生活をしていて、本当の父親は——

「どうしたの？ ミロ」

カミュが、心配そうな面持ちで訊いた。

「まるで泣いているみたいだ。僕、何か悪いこと言った？」

「違うよ。泣いてなんか——」

ぼろりと、大きな瞳から涙が零れる。ミロは慌てた。本当に、まったく泣くつもりなどなかったのに。

「あれ……？ 何で涙なんか……」

「ミロ！ だめだよ！ 擦らないで！」

目を擦ろうとしたミロの手を、カミュは慌てて押し止めた。じつと、涙に濡れた頬を見つめる。

不意に、カミュの唇がミロの頬に触れた。微かに、くちなしの花の香りがした。びつくりして身を竦め、固くなつたまま親友の顔を穴の空くほど見つめる。胸が、破裂しそうな程に痛い。

「（めん……あきはかだった。君は僕なんかよりずっとたくさんつらい思いをしているから……だから……）」

「カミュ……」

「でも、信じてほしい。だからこそ、君を心から尊敬してる。僕は本当に世間知らずで、君から見たら腹立たしい程甘えた人間かも知れないけど、どうか——」

一人で閉じこもらないで。悲しみを、たった一人で背負い込まないで。

ミロは、震える手をカミュの背中に回した。涙が、堰を切つたように溢れ出る。

——それでも、君には解らない……解つて欲しくなんかない！

世の中が、歪んで見える。それがどんなに辛いことか。知らないで一生を過ごせるなら、どんなにいいだろう。

しきりに詫びるカミュの呟きを耳元で聞きながら、ミロは温かい体を

抱き締めて仰向いた。嗚咽が、またミロの口をついた。

カミュは息を切らせて奥の部屋へと駆け込んだ。——この
一か月間、子供たちには近寄ることさえ許されなかつた部
屋。今もカミュは、司祭の手から魔除けの聖水を戴いてこの
部屋に入るのだ。

エラスムスがラテン語による聖書を発行し、トマス・モア

が『ユートピア』を発行した年、ドイツは理想境とはあまり
に掛け離れた状態にあつた。聖職者の腐敗、領主達の経済事

情悪化による重税、恐ろしい伝染病、慢性的な飢饉・・・理
想を描く物語が生まれたのは、現実の醜さから離れ、未だ心
が健在であることを確かめたかつたからでもあろうか。

カミュたちの住む上シュワーベンもまた、今恐ろしい危機
に直面しつゝあつた。数年前大陸を脅かしたペストの火種が、
彼らの身近にまだ残つていたので。

「・・・父さん！」

カミュの瞳は、床上に横たわる一人の人を食い入るように見
つめていた。

「・・・さあ、そばに行つて。でも決して体に触れてはいけな
いよ・・・」

司祭が、低く抑えた声でカミュを促す。

カミュの父であり、名オルガニストであつたジョルジュ・
フロベールは、既に昏睡の縁にあつた。一月前から町を襲つ
た伝染病。丁度二週間前に妻を死に至らしめた病から、彼も
また逃れることは出来なかつたのだ。

「・・・父さん・・・聞こえる？ 僕だよ・・・頑張つて・・・死な
ないで！」

涙混じりのカミュの声に、病にやつれた身体が少し身じろぎ
する。

「父さん・・・！」

「早く！ 早くこつちへ！」

大人たちの急かす声が、いやおうなしに耳に突き刺さる。

その時、ゆつくりとジョルジュの瞳が開いた。もうとうに現世を飛び去ったと思われていた彼の意識が、今一度だけ戻ってきたかのように。

「……カミュ……」

「父さん……僕がわかるの」

「……そこはもう少し遅く……そう……ペダルは離さないで……息を詰めたカミュの前で、ジョルジュが幸せそうに微笑む。

「ああ……アンナ、どうした……？？今行く……」

やせ衰えた右腕が、何かに縋るように伸ばされた。空を見つめる瞳は、まだこんなにも生き生きとした表情が出来るのかと思わせるほど幸せそうで、ほんの一瞬、カミュに彼が瀕死の病人であることを忘れさせた。平凡な、けれど幸せだった一生を思い起こしているのか。それとも、カミュには見えない母の姿が彼には見えているのか。

伸ばされた右腕が、ふと支えを失ったように崩れ落ちる。

小さな部屋に、沈黙が訪れる。

「……父さん？」

町医者かゆつくりと歩み寄り、カミュに見えないように脈と瞳孔とを調べる。

「……ご臨終です。……神よ、この清らかなる魂を汝の許へ導き賜え」

——ああ……！——

出来ることなら、亡骸にすがりついて泣き叫びたかった。ほんの二週間前に母を失ったばかりだというのに、何故今また父が連れ去られてしまうのだろう。

「父さん……父さん……！」

「……カミュ、辛いだろうがもう出なさい。この部屋に長居してはいけない」

「いやだ！僕はここにいたい！」

少年を連れ出そうとする司祭の腕に抗って、カミュが叫ぶ。

司祭は、ややきつい口調で泣き叫ぶ少年を諫めた。

「カミュ、聞き分けのないことを言うんじゃない。君まで病に倒れる気か。お父さんは最後まで君のことを心配していた。そして、君の弾くオルガンのことを——」

「……オルガン？……」

舵を失った心が、その言葉にふと秩序を取り戻す。

「……彼は常々言っていたよ。君のオルガンは自分を遥かに

越えていると。君はあの金属と木で出来た楽器に、様々な生命を吹き込む・・・自分がどれだけ努力しても、君が高らかに歌う神への賛歌には遠く及ばないのだと。だから彼は、君に技術だけしか教えないのだと言っていた。君が誰に構うことなく、思うままに、神を、音楽を称えることが出来るように。君を一人前のオルガニストに育て上げることは、彼にとつては信仰の証でさえあつたんだ・・・」

「そんな・・・」
カミュは黙つて床上の父を振り返つた。まるで眠つていられるかのような、安らかな表情だつた。その閉じられた瞳には、きつと死した魂を迎える天国の門が映っているのだ。

「・・・カミュ。さあ、涙を拭つて送り出してあげなさい。彼は、立派にこの世の勤めを果した」

「勤め・・・？」
「そう。」
振り返つて自分を見つめるカミュの瞳に、司祭は微笑む。まるで、遠い憧れを望むように。

「君という、二人とない宝物を残したよ。『神に愛されし者』
と言う名前そのものの・・・」

今はここにはいない、少年の子供らしい尊敬と憧憬を集めてやまなかつた人。

その彼が自分に『音楽』を託したのだとしたら――。

「・・・わかりました。」

拳を握り締めて、カミュは立ち上がった。もはや、ここに
いるべきではない。自分の身を案じてくれている、司祭の心
づかいに答えるためにも。

「・・・私は・・・父の後を継ぎます。一生を神様に捧げ、きつ
と西欧一の音楽家になつてみせます」

「カミュ・・・」

「どうか・・・父を・・・よろしく願います・・・」

もう一度、父の面影をしつかりと瞳に焼きつける。次に会う
時は、全て焼きつくされて白い灰になつていことだろう。

「失礼します・・・！」

後も見ずに、カミュは部屋を飛び出した。涙が堰を切つた
ように溢れ落ちる。何度かつまづきながら、カミュはいつし
か小さな公園へとやつて来ていた。外界を支配していたのは、
人の世界など知らぬ気な暖かな太陽、黄金色に色づいた菩提
樹の下で、カミュは独り、声を上げて泣いた。

父をなくして以来、カミュは前にもまして音楽にのめり込むようになった。オルガンを弾いている時だけは、悲しかった出来事を忘れ、安らぎを得ることが出来たからだ。あの日、自分に立てた誓いを守るため、カミュはそれこそ体力の続かなかぎり勉強した。それでも人前では、決してかつての微笑みを絶やさなかったのだけれども。

——カミュ……——

ポジティーヴの轡を押しているミロには、そのカミュの働哭がわかる。

——どうして何も話してくれない……？——

葬式が終わり埋葬が済んでも、カミュはミロに泣きつこうとはしなかった。カミュがどんなに父親を尊敬していたか、ミロは知っている。本当の意味での『父親』を知らないミロは、親友のその傾倒ぶりを理解出来ず、首を傾げると同時に羨ましくも思ったものだ。だからカミュが毅然とした態度でミロの目の前に現れた時にはびつくりしたし、その上父の為のミサ曲を立派に弾いてみせた時には更に驚いた。

だがこうしてポジティーヴを挟んで向かい合うと、カミュの本当の姿が見える。行き場を失った悲しみに、ともすれば押し潰されそうになっている心が。

——君は僕にまで本当の心を偽っている。そんなふうには押えついたら、いつか心が破れてしまうのに……——

「ミロ？」

カミュが指を止め、心配そうな面持ちでミロの顔を覗き込んだ。

「どうしたんだ？ 具合でも悪いのか？」

「え……？」

突然の問いにびくつとして、ミロも轡を押す手を止める。

「全蒸風に力がないから……君はいつも有り余る程の風を送つ

てくれる

のに」

「・・・違ふよ」

ミロはふいと横を向いた。一体彼は、どうしてこう他人の心配ばかりするのだろうか。

「・・・君のことを考えてた」

「僕のこと？」

「うん・・・」

ここで、しりごみしてはいけない。ミロはきつと顔を上げ、まっすぐにカミュを見つめた。

「・・・カミュ、無理してるんじゃないのか？」

「え・・・？無理なんて——」

ほんの一瞬、カミュの瞳に驚きの色が走る。

「最近、ずっと夜遅くまで勉強してるって聞いた。ただでさえいろんなことがあつたのに、そんな無茶をしたら——」

「してないよ。」

だが、カミュは簡単に否定した。簡単過ぎて、誰一人口を挿む余地もないほどに。

「・・・無理なんて、してないよ。」

かつと、ミロの頬に血が上る。

「うそだ！」

思わず、ミロは叫んでいた。そんな筈がない。だつたらどうして、そんな身を切られるような旋律を紡ぐ

「・・・本当に、大丈夫なんだ。僕は無理だなんて思つてない。音楽が好きだから、勉強したいと思う。・・・それだけなんだ」

ミロは、くつと唇を噛んだ。彼が聞きたいのは、そんな答ではなかった。カミュは、明らかに話題をぼかしている。追求されたくないからなのか、それとも——。

「・・・それより、君の方が最近変だよ」

話題を変える必要を感じたのだろうか、カミュが静かな声で訊いた。

「最近、よく物思いに耽つてる。近寄り難いくらい厳しい、悲しい表情をして。何かあつたのか？」

何も無い。何も変わらない。だがそのことこそが、ミロの憂慮の最大の原因だつたのだ。

ミロは、溜め息をついた。カミュが、微笑んだ。

「・・・ね、心配事があるなら言つて。何も出来ないかも知れないけど、きつと一人で悩むよりはずつといいよ」

——カミュ……！——

その途端、ミロの胸を強烈に何かが駆け抜けた。一人で悩まないで。ずっとそれを言いたかったのは、ミロの方だ。

「……ずるいよ、カミュ」

低い、押し殺したような声が、ミロの口から漏れた。

「……君は僕に何も話さないくせに、僕にはそう言うのかい？」

「ミロ……っ」

「もう……たくさんだ！」

身勝手な怒りだとは、分かっていた。それでも、叫ばずにはいられなかったのだ。

「ミロ！」

矢庭に立ち上がって部屋を飛び出したミロを、カミュの驚いたような声が追う。

ずっと、待っていた。自分にだけは、心を解放してくれる日。大好きだったカミュの笑顔を望むよりも、更に強く。

——気が付かないとでも思った……？君が、オルガンを弾くことで悲しみを浄化しようとしたことに——

握り締めた手のひらに、きつく爪が食い込む。

「……どうしようもないんだ、ミロ」

一人残された部屋で、カミュの呟きが静かに響いた。

「話せばそれだけ、余計に悲しくなるだけだから——」

ミロが何を言いたいのかは、判っていた。決して信頼していない訳ではない。けれど、打ち明けてどうなると言うのだろうか。自分の涙を見れば、ミロはそれ以上に心を痛めるに決まっているのだ。

——それに……僕はただ悲しんでいる訳じゃない。父さんが僕に遺してくれたものを、音に託していこうと決めたんだから——

そう。だから、これは消されてしかるべき感情じゃない。

カミュには、まだ解らなかつた。一見無駄だと思えることが、お互いの心を潤すこともあるのだということ。そしてミロもまた、たとえ苦しくても黙って見守り続けることが、時に幾千の言葉に勝ることを知らなかつたのだ。

紅と黄金の少年たちは、お互いにお互いを思いながら、離れた場所で等しく大きな溜め息をついた。逡巡する、二つの

小さな心。あるいは十分な時さえあれば、やがてそれらは邂逅を果たしたのかも知れない。だが少年たちには、その時間さえもはや残されてはいなかったのだった。

3. Gradare

der Januar, 1517.

雪が、降る。

教皇庁からケルン大司教宛の書簡を預かってきたサガは、途中小さな町の教会に宿を求めた。なるべく早くトリールの大司教座まで辿り着きたかったのだが、降り続く雪のために道半ばで足止めを食らってしまったのだ。

「ようこそおいでになりました・・・何もない所ですが、どう

ぞごゆつくりなさっていつて下さい」

ロマネスクの全盛時代を思わせる分厚い石の壁には、風雪に刻まれたいくつもの傷が走っている。ローマ教会が『信仰』を盾に理由の限りを尽くして取り立てている十分の一税、免罪符の収益金も、こういつた教会組織の末端に恩恵をもたらすことはないようだった。ケルンのカテドラル付きの司祭という『恩恵』を受けられる立場であるサガも、こうして町の教会の老朽した有様を見ると流石に『組織』に対する不満を禁じ得ない。何もかもが冷たく凍りついている中で、小さな樅の木のドアに身を寄せた初老の司祭だけが、温かな微笑みを投げかけていた。

「有り難う。助かります」

心からの感謝が、旅に疲れた聖職者たちの口をついた。

「この吹雪では、数日は止みませうまい。不慣れた雪道の旅は思わぬ危険が待ち受けているもの。天候の回復を待つてご出立なさった方が良いでしょう」

入口に手にした燭台で灯をともし、雪に凍えた旅の一行を招き入れる。ロマネスク建築の建物は窓が小さく少ないため、昼間でも中は冷たく、暗い。

「……オルガンの音が聞こえますね」

ふとサガが呟いたのは、それが冷たく凍りついた空気に共鳴して、どこか現実離れして響いたからだだった。生身の身体では決して聴くことの出来ない、天界の音楽。

「これは『悲しみの聖母』の旋律ですね……だが、こんな編曲は聴いたことがないな」

「ああ、カミュですよ。カミーユ・フロベールといって、まだ少年ですが、非常に優れたオルガニストです。きつと彼の編曲なのでしょう」

司祭が、嬉しそうに微笑んだ。

サガはじつとその音に耳を傾けた。何か、初めて知るものへの恐れとも期待ともつかない不思議な感情が、痛い程に胸を締めつけた。……何という音楽だろう。祈るように重ねられた二つの音が、ぶつかっては離れ、また寄り添って絡み合っている——耳になじまぬ不協和音が、清澄な協和音へとほどかれていく度に、胸につかえた重苦しさが解けていく。

こと音楽において、彼の知識・感性は並のものではなかった。だが後に『解決』と呼ばれることになるその手法をこんなに完全に使いこなした例に、サガはこれまで出会ったことが

なかった。

——……これは……とんでもない……——
辺りの空気がざわめいたように感じたのは、震えを抑え切れないサガの思い過ぎだっただろうか。

「どうぞ。すぐに部屋を準備しますから、しばらくここでお待ち下さい」

銀の燭台を頭の高さに掲げた司祭が、微笑みながら奥の間への扉を押し開けた。部屋は既に暖められていて、暖炉の側には小さなクッションを備えたソファが整えられていた。

そしてその右手の壁際に——おそらくこの世に二人とはいないであろう、上等の赤葡萄酒で染めぬいたような赤毛の少年が、いとも容易げに鍵盤を操っていたのだ。

——あれは……——
すぐさま音楽の守護天使聖・チェチリアの名を思い起こしたのは、何も彼の思い込みの激しさ故ではあるまい。

少年が、ふと気配に気付いて鍵盤を探る手を止めた。慌てて後ろを振り返り、旅装束の客人をみとめて会釈する。驚いたことに、その利発そうな両の瞳も深いルビーの紅。

「あ……すみません。すぐに部屋を空けますから——」

「いや、続けてくれて構わないよ、カミュ」

いきなり名を呼ばれて、紅の瞳がほんの少し揺らいだ。フラマン語に近い発音は、客人が北ドイツの人間であることの証だ。

「どうしたんだ？カミュ」

戸惑いの気配を察して、羽根のようなボーイ・ソプラノがオルガンの後ろから舞い降りてきた。少年の鞆押しだった。

「御客様かい？」

出会いとは神の織りなす奇跡。とはいえ、サガはその光景のあまりの美しさに、心打たれずにはいられなかった。子供ながらカミュの技術を余すことなく生かし切った風使いは、また大天使の容貌をも合わせ持つ少年だったのだ。黄金の髪と、サファイアの瞳。まるで彼の存在自体が、暁の少年と響き合っているかのように。

「・・・始めまして。」

「ああ、始めまして。いきなり邪魔してすまなかつた」

「サガはやつと我に返り、一、二、三度眼をしばいた。」

「・・・私はケルンで司祭を勤めるサガという者で、この雪のために数日こちらに泊めて頂くことになった。・・・カミュ、

君のことは司祭殿から伺ったよ。素晴らしいオルガニストだと、自慢げに話しておられた」

困惑の理由を悟り、穏やかな口調で語りかける。カミュは、少しはにかんだようだった。黄金の少年の方は、戸惑いつつも張りつめた緊張を解こうとはしない。

「・・・生まれて初めて、こんなに美しいスターバト・マーテルを聴いた。正直言つて、身震いしたよ。出来れば是非、名カルカントの名前も伺つてもう一度演奏を聴かせて頂きたいんだが・・・」

「・・・名前は・・・」

黄金の少年が、ゆつくりと口を開いた。

「マイルス・アマリア・サヴォナローラ。ミロと呼んで下さつて結構です」

「・・・サヴォナローラ？ あのフィレンツェの？」

「母方の血です。父はドイツの人間です」

「・・・血縁か・・・」

サヴォナローラとは、フィレンツェで強硬な神権政治を行いついには破門に処せられた修道士の名だ。火炙りになった修道士との関係をあまりにあつざりと認められて、サガはしば

しその一言に潜む不自然さに気づかなかった。何故彼が母方の姓を名乗っているのか、という疑問に。

サガが思案に耽つている合間に、小さな楽士たちは次の曲の準備を進めていた。準備といつても、楽譜などはない。即興演奏の題材となる定旋律をグレゴリオ聖歌の中から選び出して、展開の打ち合わせをするだけだ。

ふとサガは、面白いことに気付いた。メロディーを口ずさむのは、オルガンニストのカミュではなく、カルカントであるミロの方なのだ。

「……とても奇麗な声をしているね。そう……まるで硝子みたいな」

やつと少しだけ、ミロが微笑つた。カミュは嬉しそうに、友人を眺めて言った。

「ミロは、街一番の最高声部なんです」

「成程……君は？ 声の感じからすると、アルトかな？」

「僕は歌いません」

きつぱりと言いつつ切られて、サガはまじまじと暁の少年を見つめた。何故だろう。この声なら、歌つても十分に使えるだろうに。

「……そうか、君はオルガンで伴奏をしなければならぬんだな」

「それもあります。でも、一番の理由はこの身体のせいなんです。呼吸器官が弱くて……」

残念そうな声だった。サガは、自分の質問を後悔した。

「……グレゴリアン・チャントのグロリアによる即興曲をやります。うまく行けば七変奏くらい出来るでしょう」

『楽士』の顔に戻つたカミュが、こともなげに告げる。

やがて、ゆつくりと深呼吸するだけの間を置いて、壮大な《栄光の賛歌》が旅人たちのくつろぐ広間を満たした。

「次……『神の子羊』でいくよ」

カミュはオルガン越しにそう告げて、第二旋法のメロディーを奏でた。『平和の賛歌』と呼ばれる曲である。

ミロは、カミュのどんな変奏にも楽々といつてきた。それ

はあたかも、ミロ自身の頭の中で音楽が作られているかのよう。ミロがカルカントをつとめるときだけは、カミュはよけいな配慮に煩わされず、曲に没頭することが出来た。自分の紡いだ音が、想像していたより何十倍も豊かな息づかいをもつて響く時、我を忘れたことさえままあった。

長いメリスマ部分を弾き終えて、カミュは静かに息をはいた。耳に残る余韻が、心地良い。

「…有り難う。流石だね。一度も途切れなかった——」
オルガンの表へ出てきたミロを見上げ、カミュは笑った。ミロもまた、満足そうに笑った。

「君の音ならね。続きがわかるんだ。多分次は、こうくるって。」
「そのせいなのか。本当に、次から次へと音が溢れてくるんだ。指が追いつかなくて、息苦しくらい」

カミュは、先刻サガが使った名カルカントという言葉を使いついて出していた。今までに、カミュの腕を褒めた人間は山といた。だが、その影で彼を支えるミロの才能に気付いたのは、サガが初めてだったのだ。

「…本当に、作曲しているのは実は君なんじゃないかときえ思うよ。あの司祭様も、君のこと高く買ってたみたいだし

ね。」

「僕は、あの人は苦手だ。」

不意に、ミロは声の調子を落として言った。それから人目を憚るように振り返って、サガの去っていったドアを見やる。

「え……どうして？」

「うん……何となく。あの人の目は、何でもかんでも透かしてしまいうだから——」

人の心の、あらゆる罪を隠した秘密の領域。そんな奥深くにまで、踏み込まれるのはたまらない。

ミロは少し言葉を濁した。本当は、それだけではなかった。ミロははつきりと、サガの瞳にカミュへの執着を読み取ったのだ。

——あの人は、カミュを自分のものにしようとすることも知れない。——

それは、確かにミロの中にも渦巻いていた感情だった。神様でも誰でもなく、自分だけを見つめてくれたなら。だが一方で、そんな自分を激しく咎める自分がいた。一体何の権利があつて、カミュの音楽を独り占めすることが出来る？ 万人の心に向けて花開くからこそ、彼の音楽は気高く、尊く、

美しいのに。

「ふふ……たまたまここに立ち寄っただけなのに、そんなに恐がるなんて——」

カミュは、笑った。彼には、サガの視線を恐れる理由など全くなかったのだ。全てを白日のもとに晒す瞳は、心に影を持つ者にとつてこそ恐ろしい。だがカミュにはまだそのことがわからなかった。何故ミロがサガを恐れるのか——敬虔な信徒である父に育てられ、心に闇を隠すなどという習慣とは全く無縁な彼には、不安と言う要素を取り除いても残るミロの畏れの原因に気付くことは不可能だったから。

ミロはのしかかる不安を追い払って、カミュに向かつて微笑みかけた。今は、それだけが真実だった。何があつても失いたくない、大切なひと。共にオルガンを片づけながら、ミロは胸を刺す痛みを懸命にこらえていた。

「……いと高き処には神に栄光、地には善意の人に平和あれ……」
誰もいない部屋の一角で、眩しがサガの口をついた。先刻耳にした音の饗宴が、まだ胸の奥を支配している。窓の外ではまだ雪が降り続いていて、休みなく鎧戸を叩く風の音は決して穏やかではなかったが、今の彼には外界の音など聞こえていないも同然であった。

「随分と、あのオルガニストの少年がお気に入りなのでしょうね」
両手に湯気の立つカップを携えて、彼の世話係を務めるシュルツ・フォーゲルがくすくすと笑いながら部屋に入ってきた。

「そんな貴方は初めて見たような気がします。アルカデルト司祭様が温かいミルクを用意して下さいましたが、いかがですか？」

「ああ、有り難う」

サガは僅かに苦笑して、窓際に備えつけられた木のテーブルについた。シュルツに言われるまでもない。確かに、自分はカミュの音楽ににのめり込んでしまっている。

「カミュー・フロベールと言ったな……。名前からするとフ

ランス系、正統なフランドル楽派の継承者か……」

「そのようですよ。彼は両親と一緒に、五年前この地へやって来たのだそうです。両親は一年前不幸が重なって亡くなつたようですが」

シュルツは、カップをサガの前に差し出しながら答えた。サガとは彼が俗世にあつた頃からの付き合いなので、主の考えていることならばおよそ見当がつく。

「……司祭殿から聞いてきたのか？」

「ええ、半分は。でも残り半分はあちらから喋つて下さつたのですよ」

シュルツは一言そう断つておいて、今し方聞いてきたことをありのままに話した。カミュの父親が優れたオルガニストであつたこと、その父を母親共々一年前に病で失つたこと、それからずっと生活の為にオルガンを弾いていることなど。

「……彼は本当なら、まだ教育を受けている筈の年齢です。才能のある少年だけに、このまま学ぶ機会も得られずに朽ち果ててしまうのは惜しいと思つておられるのでしょうか。しかしこのような地方では、彼に教育を施せるほどの音楽機関はな

い——」

「成程。だがケルンのカテドラルならば、それが可能だ。そう言いたいんだな」

間髪を入れず、サガはそう返した。それは、彼自身が考えていたことでもあつたからだ。

「サガ様は、それについてどうお考えなのですか？その……カミュをケルンに連れて帰るかどうかという点で……」

少し、性急な質問であつたかもしれない。だが、シュルツは問わずにはいられなかつた。何しろ、サガには六年前、二つ返事で広大なバイエルンの領地の承権を放棄したという前例がある。すべて音楽のために、だ。

「貴方は大変聡明な方です。ですがそれだけに、敵も少なくない……。今ケルンでは、次代のオルガニストがほぼ確定しています。カミュの様な存在は、貴方にとつても新たな火種になり得るのではないのでしょうか？」

「シュルツ、君は『聖なるもの』の存在を信じているかい？そこに在るだけで、すべてを浄化する力のあるものを」

いつの間にか真面目な面持ちになつたシュルツの瞳の色を眺めつつ、サガはまだ中身の残つているカップをテーブルに置いた。

『聖なる者』・・・？神のことではないのですか？』

「神、か・・・。そうだな。そうかもしれない。だが私は、神に会ったことがない。だから分からないんだ。神がどんなふううに、私を感動させてくれるのか？』

シュルツの危惧は、解らなくもない。しかし、サガは今更遠慮などするつもりはなかった。教皇が聞いたら目を剥きそうな口を叩いておいて、奥の壁際に眺めやる。素人の作品らしい木彫りの聖母子像が掛けてある。

「だが、『音楽』は違う。初めて音の饗宴に出会った時、私は魂が浄化されていくのを感じた。『聖なるもの』は存在するのだと、幼心にも実感したよ・・・以来、私の望みはひとつだけだ。『音楽』を守り、育てること・・・それさえ叶うなら、世俗の権利などいらぬ。その気持ちは、今でも変わらぬ」

「ええ・・・。そうでしたね」

シュルツは、諦めたように、また少し残念そうにほほえんだ。かつての出来事を思い出したからだった。

「貴方は、六年前にもそうおっしゃった。ご立派だと思えます。ですが、ヴェイツテルスバッハ家の行く末を思うと、私はこれで良かったのかとも思います」

「・・・小さな弱国を、富める強国にという願がある。しかし拳を振り上げてそう主張する人間に限って、自分では働こうとしない・・・私は、祖国の偉大な生贄になるには、やりたいことが多過ぎた。それだけのことだ」

サガは、つと立ち上がると、壁際に歩み寄って聖母子像を見上げた。いささか削りは荒かったが、もの柔らかな聖母の微笑みがどこか少女めいていて、暖かい。

「・・・ですが、それなら何故ご自分で作曲をなさらないのですか？」

サガの後ろ姿を見つめながら、シュルツが遠慮がちに問う。「貴方ほどの知識と感性があれば、どんな曲でも思いのままに書けるでしょうに・・・」

「・・・そう思うか？」

サガは振り返った。その微笑みは、どこか自嘲気味な影を宿していた。

「・・・私も、六年前はそう思っていたよ。だがやつと気付いた。音楽に限らず、物事全てそうなのかも知れないが——優れた理解力と、類稀な創造力とは別物なのだ。残念なことだね・・・」

その思いは、今日あの二人の少年と出会って更に確信を増したと言わねばなるまい。カミュの和声感覚も、ミロのフレージングの美しさも、サガには逆立ちしても得られないものだった。

およそ、創造者とはそういうものなのだ。

サガは、再び聖母子像に瞳を移した。不意に、既視観が胸をよぎった。

「……このマリアは、ミロに似ているな」

口にしてしまつてから、ふと思ひ直す。いや、似ているというなら、ミロの母親に、というべきだろうか。むろんサガはミロの母親の面影など知るべくもなかったが、豊かに波打つ髪や目鼻立ちなどが、あの黄金の少年に似ている。

「……彼も、計り知れない才能を秘めている。きちんとした教育を施せば、あるいは……」

シュルツは、もはや何も言わなかった。だがどこか釈然としない瞳で、じつとサガの後ろ姿を見つめていた。

街の司祭、アルカデルト神父からカミュへケルン行きの話が伝えられたのは、客人の訪れから二日経つた午後のことだった。あまりに急な話にかミュは初め驚いたが、給費奨学生として迎えてもらえるという話には、なみならぬ興味を示した。

「ケルンの教会音楽院に……?」
「そういうことらしい。サガ司祭殿は、君の才能を大変高く買つておられるようだ。……私も実のところ、君はこんな辺境の地で埋もれるさせるには惜しい人材だと思つている。もし君にその気があれば、直に司祭殿を訪ねてみなさい。この教会のことは心配しなくて良いから」

「でもミロは……? ミロはここに残るのでしょうか?」

「そうだね……。彼の場合は難しい。実は司祭殿からはミロも是非一緒にという話が来ているんだが、彼は一応領主様の嫡子ということになっているからね」

アルカデルトが一応、と断つたのには、理由がある。ミロ

は確かに戸籍上もこの地一帯を治める伯爵の長男であり、本来ならば領地内の全ての人間にかしずかれて然るべき存在なのだが、実は彼は伯爵の兄の実子なのだった。伯爵も初めのうちは引き取ったミロに興味を示さなくてもなかったが、溺愛する妻が男児を産んだので、ミロの存在が邪魔になったのだ。

「でも、ミロは一度だつてそんな扱いを受けたことはなかった！ それどころか、命まで狙われて……！」

「私もそう思つたよ。だから私も、一度はミロの除籍について伯爵に打診してみた。ミロは初めから、領地を受け継ぐ気なんてない。今だつて領主館を離れて母親の姓を名乗つて、継承権を放棄する意を明らかにしているしね。……だが何故か、伯爵が許さないんだよ」

実のところ、アルカデルトはミロについて詳しいことは何も知らされていなかった。そもそも伯爵の兄が何者なのかさえ知らないのだ。当然、何故伯爵がミロを引き取つたのかわかる由もなかった。

「……それに、ミロ自身にも、思うところがあるらしい。ケルンには行く気はないそうだ」

カミュは押し黙つた。ミロは、何かを隠している。人には知られたくないことなのか、誰かに脅されているのか、それとも――

「……ミロが行かないのなら、僕は行きません」

ややあつて、カミュはゆつくりと、しかしはつきりと言つた。
「カミュ……」

「約束したんです。ずっといつまでも、一緒にいようつて。大人になつて、お互いに結婚しても、ずっと……」

あの春の日に、風そよぐ菩提樹の下で、交わした約束を覚えていた。カミュが一人前のオルガニストになつた日、ミロは誰よりもそのことを喜んでくれて、自分の専属カルカントになるとまで言つてくれた。あの時ミロが見せた不安げな表情を、カミュは忘れることができなかったのだ。

アルカデルトは、少しだけ残念そうにカミュを見た。彼に突然舞い込んでできた話がいかに幸運なものか、十才になるやならぬ少年には理解出来なくて当然なのかも知れなかった。たとえそう説いたところで、この少年には通じなかつたかもしれない。迷いのないまっすぐなカミュの瞳を覗き込んで、アルカデルトはふつきれたように頬を崩した。

「・・・そうか・・・君がそういうのなら、私は反対はしない。サガ殿には、私からお話ししておこう。だがもう一度、ゆつくりと考えてごらん。まだ彼らの出発までには間があるから・・・」

「はい・・・ありがとうございます」

窓から見える外の景色は、未だ雪に閉ざされている。不意に、重たげな雪が胸の奥にまで暗く降り積もってくるような気がして、カミュは窓からそつと瞳を逸らせた。

まれた。

「司祭様！ミロの具合は」

カミュが風を巻いて駆け込んで来たのは、手当てに来た医師も既に帰った後だった。外套も羽織らないまま駆けてきたので、見事な赤い髪も服も雪にまみれて湿っていた。

「心配ないそうだ。軽い脳震盪だよ」

唇に人差し指を押し当て、つき添っていたアルカデルトが静かにカミュをミロのそばへと導く。生き生きと表情を変え、青い瞳は固く閉じられたままで、無造作に投げ出された腕や額には幾重にも包帯が巻かれていた。仕事ですつかり荒れた左手に、自分の傷ひとつない手を重ねてみる。その誰の目にも明らかな違いが悲しくて、カミュはぼろぼろと涙をこぼした。

自分は、ミロのような苦勞など知らない。本来なら温かな部屋で何不自由なく暮らせる筈のミロが、どうしてこんな思いまでして働かなくてはならないのか。

「カミュ・・・落ち着きなさい」

ミロが負傷した。

吹雪で飛ばされた倉庫の鎧戸の修繕中に、足場が崩れたのだ。幸い大きな怪我はなかったものの、強く頭を打って脳震盪を起こした。少年は気を失ったまま、近くの教会に運び込

アルカデルトはカミュの頭を優しく撫でて、白いハンカチを震えるその手に握らせた。気がつくまでミロについていたのは山々だが、彼には聖務日課がある。

「大丈夫だよ。じきに目を覚ます。そうしたら温かいスープを飲ませて、すぐにまた休ませなさい。もし容態が変わったら、すぐに私を呼びにおいて。私は礼拝堂にいるから」

「司祭様……」

カミュが低い声で引き止めた。

「どうして……ミロばかりがこんな目に遭わなくてはならないんですか？ ミロは僕と同年で、同じように毎日お祈りもしているのに」

とつさに返す言葉が見つからず、老司祭の表情が困惑をかたどる。

「まだ、足りないんですか？ どうして……神様は、ミロのことを嫌っているんですか……？」

「カミュ、それは違う。イエス様は、きつとミロのことも愛して下さっているよ。ただ、人にはそれぞれ違った運命があるんだ」

——もつとも、神は君のことを特別に愛しておられるかも知

れないが——

胸の中で密かにそうつけ加えて、アルカデルトはカミュの肩に手を乗せた。

「……実は、ミロの運命も動き出している。今度のことでとうとう、城から正式にミロを嫡子として迎えるという知らせが来たよ」

「え……？」

「ミロが良いといえば、すぐにでも迎えに来るそうさ。かつては継母上がミロを傷つけようと図ったこともあつたようだが、今度は伯爵の兄君の名において、以前のような危険は絶対にあり得ないと言っている」

カミュは目を丸くして、司祭を見つめた。あれほど疎んじて、毒殺まで図つたミロを、何故今になって……

「流石に、伯爵もこのままミロを疎外し続けるのは神の御心に反すると思うたのだろう。……もうミロは、危険な仕事をしなくてもいいんだ」

カミュには一通りの結論を述べたものの、アルカデルトには実は引つかかりがないではなかった。先日、別の用向きで城から訪ねてきた使者の様子が、どう見てもおかしかつたの

だ。

——ケルンの司祭がこの地に逗留していることに、ひどく驚いていた。あるいは彼らとミロの間に、何か繋がりがあるのかも知れない——

いずれにせよ、アルカデルトはミロの父親について何も知らない。取り敢えず、ミロの意思を尊重するよう勧告する以外に打つ手はないのだ。

「……だから、いいね？カミュ。二度とそんなことは口にしたように。誰が聞いているとも知れないから——」

「はい……」

渋々承知した態のカミュを眺めやって、アルカデルトは小さな溜め息をつきつつ部屋を後にした。

ていた。伯爵は、ミロを嫡子として城に迎えるという。だが果たして、ミロが今更承知するだろうか？

『約束してくれる？どんな時も、ずっと一緒にいるって。』

ミロの言葉が、耳に蘇る。いつやって来るとも知れない別離への不安に流されて、切なげに揺れていた瞳。

——僕の、せいだ。——

そんな一言が、不意にカミュの胸をずきんと突いた。たとえ幾千の他の理由があろうと、ミロをこの町に引き止めていたのは自分なのだ。こんなことになって初めて、カミュはその事実の重みに気付いたのだ。ミロの母親がこの地で亡くなつてから三年が経つ。その間、ミロが職を得るのにどれほど苦労してきたか、カミュは誰よりもよく知っていた。ミロはカミュのように資格を有している訳ではない。なまじ領主の息子という肩書きがあるために、ミロを迎え入れてくれる親方も無きに等しかった。

ミロに辛い仕事をさせて、その前で裕福な暮らしをしていたのも自分。こんな傷を負うまで、ミロをこの地にとどめておいたのも自分。

司祭が去つた部屋で、カミュは先刻の言葉の意味を反芻し

——そして僕は、未だにケルン行きの誘惑から逃れ切れない

でいる——

受け止めるには重過ぎる罪悪感が急に胸の内を支配して、カミュは息苦しさに深い溜め息をついた。自分が、酷く穢れた存在であるように思えてならなかった。ミロは何よりも自分を大切に思ってくれているのに、自分には大切なものが二つある。その二つを秤にかけなければならなくなった時、自分は一体どちらを選ぶのだろうか——？

「う……ん……」

静かだった細い身体が僅かに身じろぎして、ミロがゆつくりと目を開けた。サファイアを思わせる青い瞳は暫く天井を彷徨って、それから馴染みの友人の顔の上で焦点を結んだ。

「ミロ……気がついた？」

「あれ……？僕はどうしていたんだっけ……」

「鎧戸を直して、足場から落ちたんだよ。君が意識を失ったって聞いて、本当に胸が潰れるかと思った……大丈夫かい？」

いつになく落ち着かないカミュの声が、ミロの記憶を呼び戻す。そういえば、体重を乗せた足場が腐っていて……

「そうか、それであつさり気絶したんだ。情けないな」

「情けない……」

カミュはあつげにとられてミロを見た。

「とんでもない！ そんな怪我で済んだのは奇跡だって、皆が言っていたよ！ そのまま死んでいてもおかしくなかったって……！」

思わず大声を上げてしまつて、慌てて口を押える。安堵感も手伝つてか、心配した分だけ、何やら怒りに似た感情が込み上げてくる。

だが、ミロは笑つただけだった。本当は骨折した左手が疼いて仕方がなかったのだが、彼はカミュに余計な心配をかけたくなかったのだ。さりげなく左手を庇いながら、ミロは軽い口調で弁解を繰り返した。

「でも、本当に何でもないよ、このくらい。流石に気絶したのはこれが初めてだけど、こんな怪我は今に始まったことじゃないしね」

「……何だつて、それじゃ君は今まで怪我をしても、僕には黙つてたのかい？」

「喋る程の怪我じゃないよ。第一みつともなくて……」

「そんな……！」

うかつだった。カミュは秘かに唇を囁んだ。今までだつて十分に危険はあつたのだ。そのことに思い至らなかつたばかりか、ミロの怪我にも気付かなかつたなんて！

「……君に、お城から迎えが来たよ」

「……え……？」

脳が命令を下す前に、低い声がカミュの口から漏れた。意外な言葉に、驚きと沈黙が緋い交ぜになつて返つて来る。

「君を……正式に嫡子として迎えるつて……君は、もうこんな下町で働かなくてもいいんだ」

自分は何を言つているのだろう。カミュは、心とは裏腹な台詞を紡ぐ自分に、少なからぬ動揺を感じていた。こんなことを言いたいんじゃない。怪我をして弱つているミロに、こんな、まるで突き放すような——！

「……何だつて……？」

ミロが、ゆつくりと身体を起こした。その白い頬は、先程眠つていた時よりも更に青ざめていた。

「どうして……君が……そんなことを言うのか？」

「もう限界だよ、ミロ。こんな生活を続けていたら、いつかきつと大変なことになる。……君は将来の領主様だ。もうそろそろ、

それなりに勉強もしなきゃならない。……僕も、ケルンに行つて、音楽を勉強する——」

「カミュ！」

終わりまで言わずに、ミロが叫んだ。固く握り締めた拳が血の氣を失つて、蒼白になつていた。

「本気で言つてるのか、僕に、あんな父親の元に行つて……

いつもいつも疎外されて、まともに話したことすらないので！」

「だけど……今のその日暮らした生活よりはましだよ！」

それはミロへの配慮と言うよりは、自分を責め続けた拳句の子供っぽい八つ当たりだったかもしれない。だが今となつては、もう後には引けなかつた。たとえ売り言葉に買い言葉でも、いずれは言わなければならない台詞なのだ。

カミュは身勝手な口を呪いつつ、ついに決定的な一言を口にした。

「……君は行くべきだ。これ以上、こんな所にいちやいけない」

「カミュ……」

冷たい沈黙が、部屋を支配する。

不意に、すつとカミュの中から激昂が引いた。何かが、二人の間に立ちふさがったのを感じた。誰よりも近くにいて、手を伸ばせば何の苦もなくその心に触れられた親友。それなのに、今は厚い壁を隔てたように遠かった。ただ感じるのは、ひたひたと押し寄せてくるミロの痛い程の怒りばかりで――

「……はつきり言えば？ 僕が邪魔だって。」

澄んだソプラノが紡ぎ出した声は、割れたガラスの破片のように鋭くて、冷たかった。

「ケルンに行きたいんだろ？ 綺麗事を並べる必要なんてないさ、君は音楽家なんだからね。勉強したいならそうはつきり言えばいい。……心外だよ。そんな小細工でもしなきゃ、僕が君を引き止めて修業の邪魔をするとも思った？」

「違う！」

決め付けられて、かつとカミュの頬に血が上る。

自分の言動が招いた誤解だった。すべての非が自分にあることも、十分過ぎるほど分かっていた。なのに、許せなかった。本当はどこかに隠されていたかも知れない、エゴイステイックな心を言い当てられたことへの、恥ずかしさと怒りとで。

「違う？ じゃあ『孤児』の友達でいるのが嫌になった？」

「ミロ！」

バシツとミロの左頬が鳴る。切れる程に唇を噛み締めて、カミュは熱い手のひらを握り締めた。彼が大切な右手を暴力に使ったのは、これが初めてだったのだ。声に鳴らない言葉の代わりに、幾筋もの涙が溢れ出る。

「……こんなの……目茶苦茶だ！――」

投げ遣りな一言を自分自身に叩きつけて、カミュは言葉を失った部屋を後も見ずに走り出た。

「カミーユ・フロベール……」

誰もいない礼拝堂に、アルカデルトの眩きが広がる。

「いつか、こんな日が来るとは思っていたが……」

望んでも得られない、才能と幸運。高名な彼の父でさえ、カミュ

の作り出す音には遠く及ばなかった。全ての人々に惜しみない愛を注ぐ神は、何故に、かの少年を天上の音楽の担い手として選んだのだろう。

——そしてまたひとつ、ミロの手から大切なものが奪われていく——

アルカデルトは、頭に浮かびかけた疑念を二、三度首を振ることで追ひ払った。何を惑うことがある？地上の愛に恵まれぬ者にこそ、広く天国の門が開かれているというのに。

『神に愛されし者、か……』

その名を受けるのは一体誰なのか、アルカデルトにはまだ分からなかった。

ミュは眠れぬ夜を教会の一室で過ごし、明け方の光の下で一通の手紙をしたためた。

『親愛なるミロへ。』

最後まで会えなかった事を、とても残念に思い

ます。ここを立つ前にどうしても君に会って、

謝りたかったのだけれど……』

長い手紙は、謝罪の一文で始まっていた。

あの日、一方的に部屋を飛び出してから、カミュは幾度となくミロの元を訪ねた。だがあれほどカミュの傍にいたいことを願っていた少年は、今は決して親友の前に姿を現そうとはしなかった。時が経つにつれ、カミュはいつしか、もう二度とミロが自分を許すことはないのかも知れない、と思うようになっていた。自分があの時何を言ったのか——忌まわしい記憶は決して薄れることなく、日夜カミュの心を苦しめてやまなかつたので。

旅の一行の出発日が決まり、最後の決断を余儀なくされたカミュは、一昼夜悩み抜いた挙げて句にケルン行きを決めた。

重く垂れ下がった雪雲にようやくやく切目が見えてきたのは、ローマからの旅人がやって来て六日目の朝のことだった。カ

これが永遠の別れではない。長い目で見れば、お互いその方が有益だろうと考えたからだつた。

今日、六年間をミロと過ごしたこの町を後にする。その前に、どうしても本当の心を書き留めておきたかつた。

『遠く離れても、君の面影を忘れることはないで

しよう。微風が梢を鳴らす度に、君の風が歌う

歌を思い出すでしょう。ずっと一緒に、という

約束を、僕はとうとう破つてしまつた。でも、

もし、もしも君がいつか僕を許してくれると

言うのなら——もうひとつの約束はきつと

守ります。きつと皇帝陛下の御前で弾けるほど

上手くなつて、この町に帰つてくるから……』

六日ぶりの太陽が、一面の白銀の世界へと暖かに降り注いでいる。

ミロは右手をズボンのポケットに突っ込んだまま、もう半刻程の間雪化粧の菩提樹を眺めていた。それは古くからある並木道の終点で、丸く囲まれた広場の回りには、樽木で作られたベンチが据えられていた。春、カミュの試験合格を喜び合つた時には鮮やかな緑だつた菩提樹も、今はすっかり葉を落としている。一年で最も美しい五月に二人で交わした約束を思い出して、ミロは深い溜め息をついた。

——思えばあの時から、今日の日は分かっていたのかも知れない——

カミュがケルンに行く事は、町に流れる噂で知つていた。たとえ聞かなくても、ミロにはカミュの選ぶ道が予想出来ていた。未だ誰も生み出したことのない音楽を磨くために、彼の尊敬する父が託した思いに答えるために、カミュはケルンへの道を選ぶだろう。それは自然な選択であつたし、一方でミロの願いでもあつた。

ミロは決して、彼の親友を自分の許に縛りつけておくことばかりを願つていた訳ではないのだ。

——あんな……卑屈な台詞をぶつけるつもりはなかつたんだ。

人影の消えた並木道に、苦しげな吹きが響く。

自分が邪魔な存在だと思つていたのは、むしろミロの方だった。共にケルンへ行けたなら、どんなに良かったか。だが、アルカデルトやカミュでさえ知らない事実が、ミロのたったひとつの夢を壊した。帝都都市ケルンにおいて、今もなお影響を及ぼし続けている『大司教』——その現大司教こそが、実はミロの本当の父親だったのだ。

大司教座に座る人間の実子の存在など、社会が許すはずもない。だが、他愛のない日々の過ぎる中で、いつしか幸せな夢を見た。自分が領主の嫡子という立場を捨てることで、そして大司教の子であるという事実を闇に葬り去ることで、もしかしたら一生をカミュと共に過ごせるかも知れないと錯覚した。

カミュが教会オルガニストを志す以上、それは叶う筈もない夢だったのに。

「……そう……わかつてたよ。どんなに願つても、いつまでも一緒にはいられないつて。それでも、君には言われたくなかった。誰に帰れと言われても、君にだけは言われたくなかったんだ……」

「ご出立の準備はよろしいですか？サガ様」

シュルツは、何やら文机に向かつて書き物をしているサガに、遠慮がちに声をかけた。

「ああ。もう終わる」

サガは書き上げた手紙を封筒にしまつて、振り返らないまま答えた。それからつと机を立てて燭台へ近づき、熱い蠟垂らして封をした。

「ケルンへの手紙ですか？」

「そうだ。いくら何でも、いきなり何の断りもなくカミュを連れていく訳にはいかないからな」

普段、同僚どころか大司教にさえあまりそういつた気を使わないサガも、音楽のこととなるといささか慎重になる。サガ

は笑つてシュルツに歩み寄ると、書き上げたばかりの手紙を手渡した。

「とりあえず彼の略歴と腕のほどを記しておいたよ。本当は名カルカントのことも書きたかつたんだが……」

「…仕方ありませんね。本人にその気がないようですから。ミロは来るでしょうか？カミュの見送りに。」

「さあ……どうだろうな。何で喧嘩したのかわからないが、どちらも外見に似合わず気が強そうだから……」

実のところ、サガは二人が喧嘩別れしたという話には疑問を抱いていた。確かに、喧嘩をしたという話は事実かもしれない。だが、その後全く音信不通になつてしまつてゐるのは、果たしてそのせいなのだろうか？

「……大司教の『秘密』について、御存じですか？」

不意に、シュルツが訊いた。

『秘密』……？』

「はい。貴方も御存じのとおり、現大司教は今の地位を手に入れるためにかなりな裏工作を施したといわれている。これもそのひとつなのですが、彼には異国の上流階級の女性に産ませた子供がいるというのですよ」

「ふ……ん……ありがちな話だな。だが、それが何か？」

シュルツの意図が解らず、サガはそう聞き返した。元来、彼は聖職者というものをそれほど信用していない。何しろ、この自分でもつとまる程度ものなのだ。

「……実は、ここへ来てずっと気になつていたことがあるのです。あのマイルス・アマリア・サヴォナローラの瞳の色を、どこかで御覧になつたことがありますか？」

「瞳……？』

またしても発せられた意味深な質問に、サガはやつとシュルツの真意を理解した。あの地中海の青には、確かに見覚えがある。というより、四六時中見ていた色だ。

「……大司教か！」

シュルツは、満足そうに頷いた。

「そうです。実は私は、彼の若い頃に一度お会いしたことがあるのです。……先日貴方は聖母子像を見て『ミロに似ている』とおっしゃいましたね。その時は気付かなかつたのですが、ふと思つたのです。ミロが大人になったら、あんな感じになるのだろうか、と」

しばらく考えて、壁の聖母子像よりはむしろ若き日の大司教

の面影に行き当たったのだとシユルツは笑った。……くだらない推理に過ぎないだろうか？　だが、そう考えればすべてつじつまが合うのだ。

「成程な……。そういえば、シユテューリンゲン伯は大司教とはまたいとこに当たる。義兄弟であつても不思議はないが……」

「伯も、秘密を守ることでドイツ最高の聖職者から封土が約束されるなら願つたり叶つたりでしょうね。もつとも、その割には預かつた子供を大事にしないようですが」

ミロの立場については、アルカデルトから聞いている。だがサガにとつて腑に落ちないのは、ミロ本人がケルン行きを拒んだという事実だつた。あんなに、別々に生まれてきたことすら不思議に思える程に共鳴し合つていたのに。何故自分から離れようとするのか。

「……そうか、ミロは自分のためにカミュの立場が悪くなることを懸念したのだな。確かに、彼の存在は今のケルンの均衡を崩すには十分だ。現大司教の失脚を狙う輩は山といふ。もしそうなれば、カミュが折角手に入れた好機も、水泡に帰してしまふ……」

それにしても、ミロは自分の実の父親のことをアルカデルトはおろかカミュにさえも打ち明けていなかったのだろうか。不意にそう思い当たつて、サガは暗澹とした気分になつた。もし打ち明けていけば、カミュは別の選択をしていたかもしれない、と思う。ここで別れてしまつたら、おそらくミロはカミュとは二度と合わないつもりだろう。

カミュの輝かしい未来に、不名誉な傷をつけないために。「……失礼します。」

戸を叩く控えめな音と共に、子供の声が聞こえた。声が小さいのは、少年の呼吸器官がそれほど強くないからだつた。

「お入り、カミュ。」

サガは静かに告げた。ふと、今のことを話してみようかという気になつたのだ。

少年は、旅立ちの姿には不似合いな布袋を下げていた。肩に掛けるよう紐がついているが、カミュの華奢な身体で支えるには、些か重そうではある。

「……その袋は？」

訝しげなサガの問いに、少年ははにかみながら答えた。「父の形見です。なるべく荷物は減らしたんですが、これだけ

は置いて行けなくて……」

開かれた袋の中身を覗き込み、納得する。中を占めていたのは、全て手書きの楽譜だったのだ。

「……凄いな。他の物は？」

「ありません。これと、そこにかかっている聖母子像だけで手一杯ですから」

サガはカミユの指の指し示す方向を見、それからゆつくりと歩み寄った。面差しはやはりミロに似ているが、こうして見るとその微笑みはむしろカミユに似ていた。

「……これは、ミロが彫ったのだね？」

問いではなく、確認の言葉がサガの口をついた。

「そうです。……どうしてお判りになったんですか？」

「君に似ているからだよ」

壁から外そうと像にかけた手を止めて、後ろを振り返る。真摯な瞳が、じつと自分を見つめている。

「……ミロには会えたのかい？」

びくつと、カミユの身体が震えた。

「……いいえ。」

「それでも行くのか？」

「……はい。」

「二度と会えなくなるかも知れない。それでも？」
少年が大きく目を見開き、両手を握り締める。

「君をいじめるつもりはないが、ミロは……」

「それでも、です。」

サガの言葉の後半を遮って、カミユは強く言い切った。今更迷うことはない。自分は決して、いい加減な気持ちで決めたのではないのだから。

「それでも、行きたいんです。」

サガは、大きな溜め息をついた。長い間捜し続けた存在がやつと手に入ったというのに、何故か胸が締めつけられるようで、切ない。

——矢張り、何も言うまい。——

結局、良くも悪くも彼らの間には割って入れないのだ。そのことを、サガは思い知った。天上の音楽は決して誰にも壊すことは出来ないが、壊れる時には自ら崩壊する。それを阻止する手だても、第三者の手にはない。

「……わかった。決意に水を注ぎようなことを言って済まなかった。……これは君が持つて行きなさい。楽譜の方は私たちが持つ

てあげるから」

壁の聖母子像を取り、カミュに手渡す。幸せな日々は、この像を象徴として現実から去って行くのだ。今日を限りに。

「・・・では、行こう。君の未来の待つところへ——」

そうして、旅人たちは再び道を北上していった。赤い髪の人オオルガニストが住み慣れた町を通り抜けながら大司教座の町へと去って行く様を、ある者は憧れを、ある者は嫉みを持って見つめていたが、その観客たちの中に黄金の少年の姿はなかった。町の外れに、大きな断崖を有した丘がある。その上から親友の旅立ちを黙って見つめる少年がいたことに、カミュも、旅人たちも、気付かなかつたのだった。